

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12946

研究課題名（和文）唐宋における楽府及び小説の継承と展開に関する物語の場と視点についての研究

研究課題名（英文）Research on the narrative place and perspective regarding the inheritance and development of Yuefu and Xiaoshuo in the Tang and Song dynasties

研究代表者

長谷川 真史（HASEGAWA, Masashi）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：40706769

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：論文「元シン〔禾+眞〕「琵琶歌」解釈の再検討」（『中唐文学会報』第27号、2020年10月）、論文「元シン〔禾+眞〕「何満子歌」と唐代の歌妓について」（『中唐文学会報』第29号、2022年10月）を投稿した。また、以上2点の論文を踏まえ、中国河北省承德市において開催された国際学術会議・楽府学会第六周年会第九屆楽府歌詩国際学術研討会において、「元シン〔禾+眞〕的楽府与音楽・楽器・楽人」と題して論文投稿、口頭発表（河北師範大学、2023年08月27日）を行った。
『九州中国学会報』第62巻に論文「元シン〔禾+眞〕の「霓裳羽衣譜」について」を投稿し、掲載された（2024年4月25日発行）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかになったこととして、「史才」「史筆」「実録」の語が重要なキーワードとなることを指摘できる。唐代の歌詩（楽府）と小説とは、「史才」「史筆」という観点から密接に連関を保ちつつ、物語の継承と発展とを促していたことがうかがえる。また、以上の成果を踏まえた課題として、宋代以降の中国文学史、日本古典文学史への影響に関しては考察が行き届かなかった点が挙げられる。加えて、物語研究の視点として、歌詩（楽府）からナラトロジーあるいは物語学の新たな理論が構築可能かという課題も未だ十分な検討が及んでいないため、今後の課題とする。

研究成果の概要（英文）：1, Article "Reexamining the Interpretation of Yuan Zhen's Pipage" (Chuto Bungaku Kaihou No. 27, October 2020), article "Study on Yuan Zhen's Hemanzige and Geji of the Tang Dynasty" (Chuto Bungaku Kaihou No. 29, October 2022). In addition, based on the above two papers, at the 9th International Academic Symposium on Yuefu Poetry at the 6th Annual Meeting of the International Academic Conference and Yuefu Society held in Chengde City, Hebei Province, China, submitted a paper and gave an oral presentation (Hebei Normal University, August 27, 2023) titled "Music, Instruments, and Musicians in YuanZhen's Yuefu".
2, submitted an article titled "Study on YuanZhen's Nichangyuyifu" in the 62nd volume of the Kyushu Chugoku Gakkaiho (published on April 25, 2024).

研究分野：中国古典文学

キーワード：唐代文学 元シン〔禾+眞〕 歌詩、楽府 実録、史才、史筆 伝奇小説 物語 唐代の音楽 白居易

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は唐詩研究を専門分野としており、特に唐代の楽府を研究対象としている。本研究は唐代の詩人元シ〔禾+眞〕(字は微之、779~831)の楽府を研究の立脚点とする。唐代の楽府における主題やストーリー展開は唐代以降に爆発的な萌芽を見せる戯曲や小説、雑劇等の俗文学への継承と展開が想定されるべきである。そこで、楽府の中で語られた物語は具体的にいかなる「場」において継承され、どのような媒体によって受容、展開していったのかが問題となる。この問題を解決する上で中唐の詩人元シ〔禾+眞〕の文学作品に着目した。

元シ〔禾+眞〕は安祿山の乱(756)終結後に生まれた、言うなれば「戦後」の世代の詩人である。「長恨歌」や「新楽府」を制作し、本邦の「物語」文学に多大な影響を与えた白居易(字は楽天、772~846)と元シ〔禾+眞〕とは、血の繋がりを超えた生涯の友であった。また、詩文や文学理論を戦わせる好敵手でもあったと言える。日本における白居易の絶大な影響は言うまでもなく、親友である元シ〔禾+眞〕の存在感は無視できるほど小さいものではない。

また、元シ〔禾+眞〕は杜甫(字は子美、712-770)を尊崇しており、自らその墓碑銘を撰している。元シ〔禾+眞〕は杜甫の伝統的な楽府題(古題)を用いない楽府のスタイル(歌行体)を高く評価し、その影響を強く受けている。そして、白居易・李紳(字は公垂、772~846)らと共に新題の楽府を唱和し、唐代における楽府の画期をもたらすことになる。しかし、元シ〔禾+眞〕は杜甫の楽府制作を継承するのみならず、杜甫の歌行に見られる第三人称視点からの描写をも取り込み、伝奇や楽府の制作に取り入れてもいる。このように元シ〔禾+眞〕研究の立場から杜甫の歌行の視点を捉える研究はこれまでほとんど見られない。

さらに、元シ〔禾+眞〕の楽府は伝統的な楽府題に対して当時の知識人が有していたであろう先入観を逆手に取って、作品に込められた社会批判の内容を鮮烈に印象付けようとしており、従来とは全く異なる創作手法、表現形式で制作されている。しかし、楽府において語られた物語がいかに当時の文壇において受容され、展開していったかという問題について、十分な議論がなされているとは言えない。

また、元シ〔禾+眞〕「連昌宮詞」は白居易「長恨歌」とも並び称され、宋代においては「諷諭詩(為政者の訓戒を旨とする詩文)」としては「長恨歌」よりも高く評価される楽府の名作である。「連昌宮詞」は玄宗皇帝と楊貴妃とが連昌宮に御幸する様子や玄宗朝に隆盛を迎えた音楽文化を描きつつ、皇帝の離宮への行幸を戒める内容であった。しかし、その訓戒は穆宗に伝わらず、娯楽作品としての側面が受容されたに過ぎなかった。従って、「連昌宮詞」は楽府の「うた」としての側面が宋代の曲子詞文学へと分岐していく分水嶺となったと言える。

一方、「ものがたり」としての楽府は、中国では小説や戯曲へ、日本では物語文学へと展開していったと考えられる。日本の物語文学、とりわけ歴史物語に関しては物語と語り手との関係に着目する。杜甫や元シ〔禾+眞〕・白居易の作品に現れる語り手、特に白髪老人が栄枯盛衰を物語するという構造は、六朝以来制作された楽府「白頭吟」の系譜に位置づけられるものである。日本の歴史物語では、例えば『大鏡』にも100歳を超える老人が語り手として登場する。こうした「ものがたる老人」は「物語」という虚構の中に「歴史」という真実性を担保する役割を担っていたと考えられる。日本文学に現れる語り手は、杜甫や元シ〔禾+眞〕・白居易の楽府に現れる老人たちの系譜に位置づけられ、元シ〔禾+眞〕はその継承と展開に大きな役割を担っていたことが指摘できるのではないかと想定されるのである。従来、元シ〔禾+眞〕の楽府に着目して、語りの「視点」という観点から評価する試みは見られない。

唐代における老人の語り手については、川合康三「杜陵野老」杜甫の自己認識(『中國文人の思考と表現 村上哲見先生古稀記念論文集』汲古書院、2000年)竹村則行「吳偉業「永和宮詞」における白居易「長恨歌」(および元シ〔禾+眞〕「連昌宮詞」)の受容」(『徳島大学教養部紀要 人文・社会科学』第17号、1982年)等の先行研究が見られるが、宋代の戯曲小説及び日本文学への展開と関連付けて論じたものはほとんど見られない。

また、近年「元白」と並び称される白居易に関する研究は質量ともに充実しているのに対して、元シ〔禾+眞〕研究は「唐代文学研究の弱点である」とする指摘(周相録「中国における元シ〔禾+眞〕研究の回顧と展望」2007年)があるほど遅れている。その中でも、特に元シ〔禾+眞〕の楽府及び小説に関する研究は、陳寅恪(『元白詩箋考証』古典文学出版社、1958年)以来、目立った成果が無く、圧倒的に不足している。また、周相録によってテキストの校勘や年譜の再編等の基礎的研究が行われたものの、遺漏が多く、再検討の余地が多分に残されている。また、我が国においても、花房英樹・前川幸雄(『元シ〔禾+眞〕研究』彙文堂書店、1977年)による基礎的研究が行われて以来、特筆すべき展開が見られない。

元シ〔禾+眞〕は唐代伝奇小説の作者でもあり、彼の楽府には物語的要素が多く含まれる。それは宋代以降の戯曲小説に大きく影響を与えたとともに、物語の場、語りの視点という観点において日本における物語文学の流行とも連動していると考えられる。元シ〔禾+眞〕の楽府及び小説を表現形式の面から物語論的に考察する方法は、唐宋文学史、及び日本文学史における物語の継承と展開の様相を明らかにするうえできわめて有効である。

2. 研究の目的

本研究は元シン〔禾+眞〕の文学作品が日中の文学の展開に与えた影響に関する考察を研究の核とする。そして、唐宋の楽府と小説及び日本文学へと研究範囲を拡大し、最終的に包括的な視野から日中の文学の継承と展開の様相を立体的に捉えなおし、それらの文学史的現象がもたらされた要因を明らかにすることを目的とする。

また、唐宋、及び日本文学史において「うた」と「ものがたり」がいかに展開していったかを包括的に考察し、日中文学史を立体的に捉えなおし、物語がいかなる「場」において継承され、どのような「視点」から語られたか、その展開を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究における最大の問いは以下の二点である。

①中国文学の中の物語が語られ、継承された場及び作品媒体とはいかなるものであったか？

②中国文学、とりわけ唐宋の楽府及び小説に描かれる物語はいかなる視点から語られたか？

（また、物語の視点はいかに展開していったか？それはいかなる要因によるものか？）

以上二点の問題を解決するため、本研究では唐宋の楽府及び小説を研究対象とし、「場」と「語りの視点」という観点から内容を分析し、唐宋及び日本における物語の継承と展開の様相を明らかにしていく。

本研究の特色は、唐宋の楽府及び小説について、これまで十分に議論がされてこなかった物語の継承と展開における「場」という観点から分析を試みる点にある。また、文学作品において語られる物語を、語りの「視点」という観点から分析することで、物語の内容がいかに継承され展開していったかを立体的に捉えなおすことが可能になる。

4. 研究成果

(1)論文「元シン〔禾+眞〕「琵琶歌」解釈の再検討」(『中唐文学会報』第27号、2020年10月)において、元シン〔禾+眞〕「琵琶歌」本文を再検討し、描写されるエピソードや演奏技法が『楽府雜録』の記事を基にする部分が多く含まれていることを指摘した。また、論文「元シン〔禾+眞〕「何満子歌」と唐代の歌妓について」(『中唐文学会報』第29号、2022年10月)において、元シン〔禾+眞〕の楽府「何満子歌」の成立背景を確認し、本文の内容を詳細に検討した。「何満子歌」は、歌妓唐有態の歌う歌曲「何満子」が玄宗朝の音楽技術を継承した優れた歌唱であったことを称え、先人の音楽芸術を正しく伝承することを賛美することであった点を明らかにした。これは元シン〔禾+眞〕の楽府「琵琶歌」にも共通する主題であり、元シン〔禾+眞〕の音楽を主題とする文学作品の展開の一端を見ることができた。また、表現の面から見ても、「琵琶歌」と類似する音楽描写が多く見られる点も指摘した。以上2点の論文を踏まえ、中国河北省承德市において開催された国際学術会議・楽府学会第六屆年会第九屆楽府歌詩国際学術研討会において、「元シン〔禾+眞〕的楽府与音楽・楽器・楽人」と題して論文投稿、口頭発表を行った(河北師範大学、2023年08月27日)。本発表では元シン〔禾+眞〕の「琵琶歌」「何満子歌」を中心として、元シン〔禾+眞〕の楽府における音楽的作品の特徴と、音楽的故事の継承についてまとめた。

(2)『九州中国学会報』第62巻に論文「元シン〔禾+眞〕の「霓裳羽衣譜」について」を投稿し、掲載された(2024年4月25日発行)。本論文では、現在は失われた元シン〔禾+眞〕の「霓裳羽衣譜」の様態に接近を試み、元シン〔禾+眞〕と白居易の音楽的交流、音楽に関する議論の一端を明らかにした。霓裳羽衣曲という芸術音楽の継承について、元シン〔禾+眞〕は音楽を実際の演奏によってではなく、歌詩(楽府)によって物語として記録・継承しようとしたことを明らかにした。

(3)以上の論考から明らかになったこととして、「史才」「史筆」「実録」の語が重要なキーワードとなることを指摘できる。これらの語は本来、歴史記述あるいは伝奇小説を評価するときに用いられる語であるが、白居易はしばしば元シン〔禾+眞〕の歌詩(楽府)について、「実録」という観点からその「史才」を評価している。従って、唐代の歌詩(楽府)と小説とは、「史才」「史筆」という観点から密接に連関を保ちつつ、物語の継承と発展とを促していたことがうかがえる。また、以上の成果を踏まえた課題として、宋代以降の中国文学史、日本古典文学史への影響に関しては考察が行き届かなかった点が挙げられる。加えて、物語研究の視点として、歌詩(楽府)からナラトロジーあるいは物語学の新たな理論が構築可能かという課題も未だ十分な検討が及んでいないため、今後の課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 長谷川真史 | 4. 巻 29 |
| 2. 論文標題 元シン〔禾+眞〕「何満子歌」と唐代の歌妓について | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 中唐文学会報 | 6. 最初と最後の頁 22-32 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 長谷川真史 | 4. 巻 第27号 |
| 2. 論文標題 元シン〔禾+眞〕「琵琶歌」解釈の再検討 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 中唐文学会報 | 6. 最初と最後の頁 14-25 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 長谷川真史 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 元シン〔禾+眞〕の「霓裳羽衣譜」について | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 九州中国学会報 | 6. 最初と最後の頁 31-45 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 長谷川真史 | 4. 巻 大会学術交流 |
| 2. 論文標題 元シン〔禾+眞〕的楽府与音楽・楽器・楽人 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 楽府学会第六屆年会第九屆楽府歌詩國際學術研討會 論文集 | 6. 最初と最後の頁 170-177 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 長谷川真史 |
| 2. 発表標題 元シン（禾+眞）的楽府与音楽・楽器・楽人 |
| 3. 学会等名 楽府学会第六届年会第九届楽府歌詩国際学術研討会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|